

地域と連携する大学の日本語教育

～地域と学生のコラボレーション～

村野 良子

(学習院大学 文学部日本語日本文学科 教授)

一 問題の背景

留学生、外国人労働者、国際結婚、研修生、介護・看護者、不法滞在者など、国境を越えて移動する人々の数は年々増加し、平成一八年末には、外国人登録者数は二〇八万四九一九人に達し、前年比で約三・六パーセント増となった。近年の特徴は、滞在の長期化に加えて、定住化が進んでいることである。それに伴って保護者とともに、国境を越える子どもたち、日本で生まれた子どもたちの数も増える傾向にある。平成一八年度の文部科学省調査によると、公立学校に在籍している外国人児童・生徒数は七万九三六人で、

前年度より約一・六パーセント増加したが、その中で「日本語指導が必要」とされた児童・生徒数は、二万二四一三人で、前年比で約八・三パーセント増となっている。

学習院大学のある豊島区の外国人登録者数は平成一九年一月一日現在、一万五九一三人で総人口の六パーセントにあたる。国籍は中国、韓国・朝鮮が七割強を占め、来日目的は、永住・定住・配偶者が合わせて六五パーセント、就労一〇パーセント、残りが留学、就学などとなっている。一方区内の小中学校に通う外国籍の児童・生徒は二〇〇名ほどで、日本語の力が十分でないために授業についていけなかったり、学校生活に馴染めなかったりすることも少な

くないという。

本学日本語日本文学科と豊島区との連携事業は一九九七年に学科からの働きかけによって、区在住・在勤の外国人に対して「日本語教室」を開いたことに始まる。それ以来地域貢献と日本語教育専攻学生の「日本語教育研修と交流の場」として、今日まで大学院生・学部生有志によって引き継がれてきた。これに加えて、二〇〇七年度から、区の呼びかけに応じて、学部学生が区内の小中学生に対して日本語指導を行う「日本語教育指導サポート」事業が新たにスタートした。

二つの事業は、学生には、教育の実践の機会を、地域の外国人や日本語を母語としない子ども達には、日本語サポートサービスを提供する互恵的な活動であるが、実際には、当事者だけでなく、周囲の人々も巻き込んだ大きな波及効果が見られる。

この報告では、地域と大学のコラボレーションの実践例として、これら二つの教育連携事業について、その活動内容を紹介し、活動を通して、大学生にどのような学びがあったのかを考察する。

二 学生による自主講座「日本語教室」

「日本語教室」は、二〇〇五年度に区の担当が教育委員会から学習・スポーツ課生涯学習係に移行した。区は英語・中国語・韓国語の案内を作成し、春と秋の二回、区報やウェブサイトを通じて、受講生の募集と取りまとめを行う。教材のコピー費用なども負担している。大学は授業用の二教室と機材の他に運営と活動のために常時準備室一室を提供している。

「日本語教室」は大学の学期に合わせて、前期（五月から七月）と後期（九月から十二月）、それぞれ一二回でコースとなっている。定員は二〇名、費用は一コース五〇〇円で、毎週火曜日、午後二時四〇分～四時一〇分まで、日本語教育専攻の「日本語教室」メンバー（二〇〇七年度は留学生を含む学部生一四名）のうちの二名が講師役を務め、残りのメンバーと外国人学習者が小グループに分かれて協働的学習を行う形式で進められている。教える側と教わる側という形ではなく、対等の立場で一緒に学ぼうという姿勢が顕著に見られるのが最近の傾向である。

扱う内容も教科書を使って文型を教え込むというもので

はなく、学習者のニーズ調査に基づいて、「生活に役立つ」日本語が学べるように工夫されている。例えば二〇〇七年度後期のテーマは、「美容院で役立つ日本語」「旅行で役立つ日本語」「広告・チラシの読み方をマスターしてお買い物上手になろう」「手紙の書き方」などで、教室活動にディスプレイやインタビューなどを取り入れ、学習院大学生とのインターアクションを重視した学習デザインを採用している。

教室に参加する外国人は、年齢的には学生と同年代の若者が多いが、主婦や年配者、子どもなども参加することがある。国籍は中国、韓国、ミャンマー、バングラデシュ、フィリピン、タイなど多彩である。「この先生は若くて話しやすい」「気軽に助けてくれる」(区報の取材を受けた学習者のコメントから)と好評で、何回も通う人もいる。

学習院大学生は、授業で学んだ知識や方法を本物の学習者を相手に実践してみることができただが、日本語力の差や学習目的の違いなど、学習者の多様性に戸惑いながらも、知恵を出し合い、工夫を重ねて、取り組んでいる。

この活動のもう一つの意義は、区や大学事務との連絡、教室運営、テーマの設定、教案作成、授業実施、学習者と仲間による毎回の授業評価、内省と振り返りまでの一切を

学生が自主的に行っていることであろう。ウェブ上のメーリングリストを利用してこの過程を公開し、全員で共有している様子は、頼もしく好ましい。

「日本語教室」は一年目を迎えるが、これまで内外に数多くの日本語教師を送り出してきた。有志の集まりとはいえ、本学の日本語教育にしっかり根付いている。後期の授業風景の写真からはなかなか雰囲気伝わってくる(写真提供 尾崎奈津未さん)。

三 区立小学校での日本語指導サポーター

(一) 区・小学校・大学の連携

本学科日本語教育系の学生は四年次に日本語教育実習を行うことになっている。首都圏の日本語学校、地域のボランティア団体、企業の日本語研修、大学の日本語授業などが主な実習先であるが、二〇〇七年度から大学と区の連携による小学校での教育実習が加わった。初年度は大学に近く、比較的小規模の区立高南小学校にお願いできることになった。

実習の配属先は原則として本人の希望を最優先することになっているが、小学校実習は初めての試みにもかかわらず、



日本語教室

人気が高く、留学生三名(韓国籍二名、中国籍一名)を含む九名の意欲的な学生の参加が得られた。

実習に先立ち、日本語指導サポーターの内容について、区・小学校・大学の間で話し合いを持った。大学にとっても初めての試みであり、小学校にとっても通常の小学校教員養成課程の教育実習とは性質が異なるため、四月の時点で将来起こりうる事態を想定して、細部まで取り決めることは、現実的ではないと思われた。そのため、まず大枠について合意し、具体的な活動内容については、区、小学校、大学の間で相談して決めていくことになった。

最初に合意したことは次のような簡単なものであったが、学生の熱心な実習姿勢を認めていただき、後半は、学生からの要望にも柔軟に対応していただいた。学生の実習日程や連絡などは、すべて副校長先生が取りまとめてくださった。

実習内容

- ・ 一年生と三年生のクラスで主に外国籍児童に対する科学習のサポート
- ・ 日本人児童との意思疎通のサポート
- ・ 実習形態
- ・ 一年生では教室内での指導補助

- ・三年生では取り出し授業
- ・休み時間や給食時の意思疎通

実習時期

・前期六月～七月、後期一〇月～十一月の中で希望する
 一〇日間（希望日は実習前に小学校に提出）＊一日四名
 まで

九時から一二時の間（希望すれば給食時にも参加可能）

（二）実習に向けて

大学の授業では、実習先ごとに対象を想定した模擬実習を行って準備を進める。小学校グループは、「想像力に溢れる楽しい授業をしたい」と児童向けの教具や教材を工夫し、日本語がほとんどわからない子どもを想定した模擬授業を数回行った。準備の段階から楽しくて仕方ない様子が伝わってきた。学生達はネットや本で子どもの意欲を高めそうな教材や方法を調べたり、異文化に入った子どもの心理状態を聞いたりして、どんな援助が役立つかを研究していたようである。韓国人留学生は教案を自分の甥や姪相手にシミュレーションをしたそうである。

（三）実習が始まって

小学校に通い始めると、学生は思い描いていたものとは異なる現実に向き合うことになる。実習終了後に提出された課題レポートには、戸惑い、葛藤する様子が見られる。

◇一年生の入り込み指導（レポート抜粋）

入り込み指導のため一日の大半を外国籍の子どもではなく、日本人の生徒のサポートに終始する日もあり、日本語力の不足から授業への参加を端からあきらめている外国籍の子どもに対して十分な指導ができていないことをあせっていました。それに小学校の先生から実習に対して何も指導がなかったため、子どもたちの日本語指導を実習生に丸投げしているのではないかという思いもありました。何のため実習し、何を学んでいるのか、見つけられずにはいました。

（Aさん）

模擬授業では手品を使った授業など自分たちが教壇に立って行う授業を想定していたのですが、「入り込み」という形でサポートすることになり、ギャップに戸惑いました。「下敷きを入れてください」「名前は平仮名で書いてください」など、日本人の生徒にも同じサポートをしていました。

「これが実習？」という疑問もありました。（Bさん）

（写真提供 松本由衣さん 根上慧子さん）

◇三年生の取り出し指導

取り出し授業は韓国籍の二名の男子児童を対象に図書室などで行われたが、この指導カリキュラムと教材づくりは学生にまかされた。

取り出し授業では、日本の学校生活に慣れるために必要な日本語学習を目標として、仮名習得を中心に学校生活の中の語彙や学校文化を扱った。媒介語が使える場合は、媒介語を利用して理解の定着をはかり、媒介語が使えない場合は、発音や正しい表現の指導を中心に行った。

（四）実習後半

「転校当時は発言がほとんどなかった子どもも、積極的に会話に加わるようになった。緊張していた子どもにも笑顔が見られるようになり、学校生活に馴染めるようになって父母からも喜ばれている」（副校長先生）など実習の成果が目に見えるかたちで現れてくるようになった。学生も学校側の信頼を得、手ごたえを感じることも多くなり、学校の中での自分自身の立ち位置を見つけていったようである。



給食を一緒に



入り込み指導



取り出し授業風景



野外授業補助

課題レポートから一部抜粋して見てみよう。

徐々に自分のやるべきことがわかってきて、先生や生徒のみんなの力になれている瞬間を感じることができました。(中略) サポートすることによって授業に積極的になり、自分が発表できた後には、少し恥ずかしそうな、でもとても嬉しそうな笑顔を見て、私も本当に嬉しくなりました。(Cさん)

続けていくうちに、「日本語がわからないからできないこと」と「一年生だからできないこと」が段々見えるようになってきました。そしてそれを元に異文化の背景を持つこともたちへの日本語サポートをすると、的確に大切なことを指導することができるようになりました。(Dさん)

このころから実習に対する考え方が変わりました。想像していた教育実習がいかに狭い考えであったかに気づきました。(Aさん)

先生が生徒に対してメッセージを発信し続けていらっしやる姿に感動しました。お話は人生において大切なことばかりで、私にとって本当に心に響くものでした。(Eさん)

TODAY(二〇〇七年一月一七日)でも報道され、この問題に対してマスメディアが高い関心を寄せていることが明らかになった。

外国籍の子どもたちに対する日本語指導に大学が関わっている例としては東京都内で最大の外国人人口を抱える新宿区が、早稲田大学と連携して二〇〇二年から行っている早稲田モデルと呼ばれる活動がある。早稲田モデルが年少者日本語教育専攻の大学院生による専門的指導であるのに対して、学習院大学生の「日本語指導サポート」は教育実習とはいえ、専門性を持たない学部生の活動であるという点が大きく異なる。

普通の大学生が、小学校実習に参加し、葛藤を感じながら、みずから発見し、実習に対するイメージを変えていく中で気づいたこと、学んだことは予想以上に大きかったのではないかと考えている。二〇〇八年度は豊島区や小学校と相談しながら、より活動の幅を広げていくことを計画している。

韓国からの転校生が来たとき、日本人の児童が一生懸命に連絡事項を韓国語で教えようとしているのを見た。外国からの転校生のいる学校では、転校生も迎える子も、一回り成長することができると感じた。(韓国留学生Fさん)

反省点も見られる。

子どもが、この時点で何を学習すべきかについてニーズ分析が不十分だった。(Gさん)

(五) 実習後

一二月に小学校で全教職員の方を前にして実習の総括を発表し、コメントをいただく機会を得た。実習生の活動と学びや気づきを一、三年生の担任だけでなく、学校全体で共有できるように取り計らってくださった高南小学校のご配慮はありがたいことだった。大学では授業の中で小学校での日本語指導サポートの報告を行った²⁾。

今回の「日本語指導サポート」は大学と地域の連携、大学生による地域の外国籍児童学習支援の例として、日本経済新聞(二〇〇七年六月二二日)と朝日新聞(二〇〇七年六月二六日)で取り上げられたほか、TBSラジオ人権

四 結び

本学の日本語教育課程は、毎年四〇名〜五〇名の卒業生を送り出している。しかしこの中で日本語教育関係の職種に進む学生は一割に満たない。将来日本語教育に関わるにしても、異なる道を歩くにしても、ひとり一人の学生が日本語教育を通して、世界に関心を広げ、これから否応なしにグローバル化する社会の中にあって、トラブル仲裁者として、同僚として、家族として、隣人として、地域や職場の「外国人」と自然体で付き合っていける社会人に育ってほしいというのが担当者の願いである。「日本語教室」活動や多国籍クラスでの日本語指導サポート活動は、その目的のためかけがえのない学習環境デザインの一環であると考えている。

(1) 一九八七年に学習院大学日本語日本文学科の中に日本語教育課程が設置され、学部・大学院における日本語教員養成が始まった。

(2) 実習報告書は三月に刊行予定である。